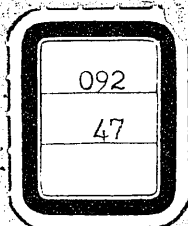


晃山紀行

小松恒著

下



字大特別圖書号

N 31

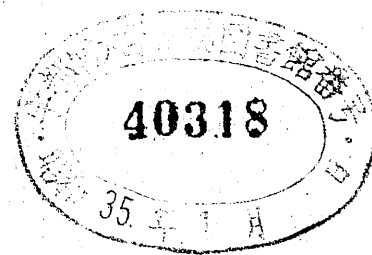


宇大特別圖書

晃山紀行

一名日光みちねと草下

十五日、午前七時、余起テ盥漱シ導ヲ雇ヒテ出ツ
 士德、困憊、從フ一能ハス大谷川ヲ渡リテ左折シ
 行ク一數武、磴ヲ陟ル、迤西町許、而シテ大道廣衢
 溪水、其中ヲ流ル之ヲ官幣社前トス石階アリ數
 十級、幾株ノ老杉、鬱然階ヲ夾ミテ生ス之ヲ過テ
 一。大。華。表。ア。リ。西。南。ニ。向。フ。石。ヲ。聚。メ。テ。コ。レ。ヲ。造。
 ル。高。三。尺。五。寸。是。元。和。年。中。黒。田。長。政。ノ。獻。ス。ル。所。



匾額ニ曰、東照大權現實ニ後水尾帝ノ震筆ニ係
ル一拜シテ入ル路左ニ五層ノ塔方三間高アリ
承塵上、十二支ヲ彫ル生々活動ノ狀アリ慶安年
中、酒井忠勝ノ獻スル所ト云フ石階アリ陟ル
數級、仁王門二間半トス維新ノ後、仁王ノ像ヲ大
猷廟門ニ移シ今ハ前ニ狛犬ヲ置キ後ニ花瓶ヲ
置ク瓶ハ唐銅ヲ以テ造ル古色蒼然謂フ琉球ノ
獻スル所ト門西ニ神廐アリ廐側ノ金松樹周圍
丈餘、枝條旁午、鬱トシテ中庭ヲ掩ヒ翠色滴ラン
ト欲ス水盤アリ長サ八尺、横ハ之ニ半ス高サ三

尺有半、花崗石ヲ以テコレヲ造リ屋ヲ設テ之ヲ
蓋フ二間石柱十二、盤ト質ヲ同ウス而シテ彫ル
ニ雲影ト花卉トヲ以テス其工巧驚クヘシ華表
アリ又唐銅ヲ以テ造ル色、漆黒、右ニ三神庫アリ
左ニ一輪藏一名笑堂ト云フアリ往時、一切經ヲ藏メ神
庫ハ現ニ祭具ヲ入ル銅鐵石燈、一百餘基中ニ就
テ南蠻鐵ヲ以テ鑄造セルモノハ伊達政宗ノ獻
スル所又石階アリ陟ル數級、石ヲ截テ垣ト爲
シ獅子ヲ刻テ之ヲ控ス右ニ三十六釭ノ燈俗ニ
籠トアリ琉球ノ獻スル所、傍ニ鐘俗ニ蟲喰アリ

其狀奇古之ト相對シテ吊燈アリ共ニ朝鮮ノ獻
スル所又九角形ノ一大燈アリ阿蘭陀國ノ獻ニ
係ル朝鮮鐘ノ東鐘樓アリ高サ二百三十尺九角
燈ノ西鼓樓アリ鐘樓ト相對ス而シテ其建造ヲ
一ニス鼓樓ノ傍ニ本地堂造向拜アリ方十貳間天
井ニ蟠龍ヲ画ク安信ノ筆ニ係ル石階ノ上ニ陽
明門先三手造アリ廻廊アリ左右各六十間門ノ前面
隨身ヲ置ク天井ニ二龍ヲ畫ク探幽ノ筆柱ニハ
鳥獸ト花卉トヲ彫リ檐下ニ蛟龍跳リ桁上ニ人
物列ス鏤刻采綴輪奐極テ美ナリ導云人此門ヲ

觀テ日ノ暮ルヲ知ラス故ニ日暮ノ門ト稱ス眞
ニ故アル哉此門掲ル所ノ匾額又震筆ニ係ルト
云フ門内左ニ在ルヲ神輿舎ト爲シ右ニ在ルヲ
神樂殿ト爲ス中央階上ニ門アリ唐門四方棟唐
破風造
ト曰フ瑞垣アリ方二十五間本社拜殿ノ外ヲ繞
ル門ノ前面屋棟上ニ鯉魚アリ鐵鎖ヲ以テ之ヲ
繫ク東西棟上各龍アリ圓柱ハ梅竹ヲ列シ虹梁
ハ玉龍ヲ躍ラス天井ニハ天女ノ舞フアリ雙扉
ニハ梅菊ノ發クアリ其經營已ニ異常製作モ亦
凡ナラス寔ニ鬼斧神造ニ出ルモノ、如シ門内

數武拜殿アリ正ニ本社ト接ス社掌一名余ヲ導
テ殿後ニ廻リ中間石ノ間ト稱スヨリ入ル殿ノ中央六
十餘席ヲ入ル前面ニハ饌具ヲ陳子又六々歌仙
ノ小額ヲ掛ク倭歌ハ則、後水尾帝ノ震翰ニシテ
左近將監土佐光起ノ畫ク所、左右ニ室著座ノ間ト稱ス
アリ各十八席ヲ入ル障子ハ則、金泥ニ麒麟ト獅
子トヲ画キ羽目ハ則、唐材ヲ以テ鳳凰ト鷺鳥ト
ヲ鏤ム金寶珠玉光輝粲然滿堂為ニ明ク目眩シ
テ正視スルヲ能ハス拜殿ヲ降り唐門ヲ出ツ門
側ニ唐銅燈一基アリ聞ク東福門院ノ寄進スル

所ナリト神樂殿ノ北寶庫アリ什物多クハ公ノ
世ニ在ルノ日、左右使用ノ物ニ係ル東ノ方小門
此門、肥田甚五郎カ刻ム所ノ睡ヲ出ツ磴アリ千
餘級、曲折數四北ニ向テ陟ル又門アリ華表アリ
此間、老檜古松前後茂生シ風聲宛、怒濤ノ如シ丘
巔又一殿アリ西ニ向フ石華表ノ前ヨリ路上總
テ石ヲ疊ミ甃ヲ為ス此ニ至テ四面甃石平坦ナ
ルヲ砥ノ如シ殿後ニ塔アリ石柵之ヲ繞ル是實
ニ公カ遺骨瘞埋ノ處ト爲ス

謁東照公廟

清和云、おのれ
はきまわし
てはるるま
るるま

千代田宮田生
う、まゝつむの
おとせ、此
神とあるは
今さうに思ひ
出らまぬ
静齋曰以魏武
昭烈斷定確乎
不可拔
杜陵曰先提分
叙布置井然

誰勸君玉、馬首真成一擲。賭乾坤、用成呼吸制。
變霸先定、今古快戰推關原、駕馭群雄、人自在神。
算偉略、歷四海、魏武機權、昭烈仁併成一統、三百
載。
石華表ノ東ハ則三佛堂ニシテ西ハ則大猷廟ナ
リ東門ヲ入ル寺アリ滿願寺ト曰ヒ堂アリ三佛
堂往昔ハ金ト稱スト曰フ堂南ニ面ス廣サ二十間阿彌
陀佛千手觀音馬頭觀世音ノ三大佛ヲ安シ傍ニ
勝道上人慈眼大師ノ像アリ又毘沙門天大黒天
辨才天アリ堂ノ裏面中央ニ在ルヲ不動尊ト爲

シ左右ヲ十二天ト爲ス相距ル數歩慈惠大師ノ
堂アリ又相輪檜アリ檜側ニ燈アリ極テ巨大聞
ク相輪檜ハ大師堂ト與ニ元新宮ノ傍ニ在リ維
新ノ後此ニ移スト檜周十餘尺高サ四十八尺中
ニ經文ヲ藏ス寛永年間天海僧正ノ建ル所ト云
フ三佛堂ノ東小門ヲ出ツ行ク一幾町此間古刹
舊菴既ニ廢シテ斷蓬ノ中ニ委スル者前後相踵
グ導予ニ語テ曰維新ノ前城内ノ寺院百有六今
ヤ其存スル者二十二滿タスト以テ此地ノ盛衰
ヲ徵スルニ足ル時ニ輕風雨ヲ送り客衣爲ニ浥

ノ漸進テ三層塔アリ四本龍寺アリ塔ハ鎌倉右大臣朝實ノ創メシ所ニシテ貞享年中ノ再造ニ係リ寺ハ勝道上人ノ曾テ願ヲ立テ業ヲ修シタル處ナリト云フ相距ルヲ數武本宮社アリ社ハ味耜高彥根尊ヲ祠ル社傍紫雲石アリ柵ヲ以テ之ヲ繚ラス此地大谷ヲ前ニシ稻荷川ヲ左ニシテ別ニ一丘ヲ爲スコレヲ東端トス石華表ハ前五層塔ハ下西ニ向テ進ム此間町餘道極テ廣シ世ニ之ヲ新宮馬場ト云フ華表アリコレヲ過キテ道岐ル西ヲ大猷廟トシ北ヲ二荒山神社トス社

大己貴神ヲ祀ル社前ニ拜殿アリ其傍ニ神樂殿アリ又水屋アリ前路ニ復ス大猷廟前常行堂間五アリ彌陀及四菩薩ヲ安シ前面ニ維摩居士ニ淨名居士ノ像アリ聞ク此堂ニ源追捕賴ノ火化骨ヲ存スト蓋公ノ薨スルニ及ヒ安達盛長稱藤九郎奉シ來テ山麓ニ瘞メシ者而シテ德川氏閼宮ヲ營スルノ時發掘シテ此ニ移スト云フ又法華堂四間アリ廻廊アリテ連接ス正面ニ普賢菩薩ヲ安シ左右ニ軍荼利明王正觀世音アリ又慈覺大師ノ像アリ此堂大師ノ窆建ニ係ルト云フ

○按スルニ慈覺大師ハ仁明天皇ノ御宇嘉祥
年間ノ人ニシテ弘法大師登山ノ年ヲ距ル
三十年ニ過キス鑲倉右大臣ノ三層塔ヲ創メ
シコトキハ此ヨリ凡三百五十六年ノ後ニ在
リ因テ思フニ此地堂塔アルハ恐クハ是ヲ以
テ初メトナス

聞ク是ヨリ西南相距ル若干慈眼堂アリ傍ニ
經藏アリ鐘樓アリ堂後ノ塔中天海僧正ノ遺骨
ヲ藏スト尋ルニ及ハス仁王門アリ東ニ向フ執
金剛神即仁王前後ニ在リ後面ニ在テ較高キ者ハ官幣社前ヨリ移シ

來レ門ヲ入テ右ノ方龍光院アリ是本廟ノ別當
所ニシテ今ハ滿願寺住職之ヲ兼ルト云フ水盤
アリ構造前者ト同シ共ニ鍋島侯ノ獻スル所ニ
係ル進ムト十余武二天門アリ門東北ニ向フ右
ニ在ルヲ持國天ト爲シ左ニ在ルヲ廣目天ト爲
ス内面ニ風雷ノ二神アリ是陽明門ヨリ移シ來
ル者前面ニ掲ル所ノ匾額大猷院ノ三字ヲ大書
ス實ニ桃園帝ノ震筆ニ係ル拜シテ入ル進ム
數武石階アリ左右ノ勾欄全石刻ミ成セル者土
功ノ大真ニ想フ可シ階上ニ鐘鼓樓アリ左右相

對シテ起ツ又進ムヲ數武、夜叉門アリ門安スル
所ノ像、前後四軀、奇顏異體、其色各殊ナレリ廻廊
アリ左右門ト接ス此間、諸侯伯獻スル所ノ燈、幾
十基中ニ就テ最大ナル者、朝鮮國ノ獻スル所ニ
係ル又一門アリ唐門ト云フ瑞垣アリ本社拜殿
ノ外ヲ繞ル僧アリ余ヲ延テ拜殿ニ登ル瓊廊朱
檻進テ殿内ニ入レハ上ハ則、天蓋ヲ吊下シ下ハ
則、經函ヲ排列ス玳瑁燈ハ水晶簾ト共ニ掛リ金
香盤ハ銀燭臺ト相駢フ莊嚴華麗意想ノ外ニ出
テ金色珠光、人ヲシテ眩セシム拜殿ノ北、小門ア

リ其狀尋常ニ異レリ名ケテ皇嘉門ト云フ聞ク
此門向キノ陽明門ト朝廷特ニ其名ヲ寵賜スト
門ヲ出テ磴ヲ陟ル陟ルヲ幾百級岡上ニ堂アリ
堂後ニ塔ヲ安ス石柵之ヲ繞リ路上石ヲ甃ム等
總テ前者ト殊ルナシ之ヲ西端ト爲ス是ニ至テ
風雨彌強ク天地黯淡、人籟全絶ツ

謁大猷公廟

想君燕坐賜刀日。三百諸侯氣旣吞。慘雨悲風滿
山恨。萬松聲裡吊英魂。

此他、龍尾社、若子社、開山堂、釋迦堂、文珠堂等アリ

官幣社内、凡二十有三屋、大猷廟内亦十八屋アリ
猶此外ニ具供ノ舍、避災ノ殿アリ、實ニ規模ノ宏
潤、結構ノ善美、薄才謏學、能記スル所ニアラス
唯、閱過スル所ニ就テ聊、其一斑ヲ錄スル耳

○按スルニ延喜式神名帳ニ二荒山神社名神大

トアリ又續日本紀、文德實錄、三代實錄等ニ勲
位増進ノ一ヲ載ス、威稜昭々、或ハ其邈古鎮座
ノ神蹟ナラン乎、明治四年五月、全國神社ノ格
式ヲ正シ、初テ官國幣社ヲ定ムルニ至テ國幣
中社ニ列セラル○史ヲ按スルニ東照公、諱ハ

家康、元和二年四月十七日ヲ以テ駿河城ニ薨
ス、歳七十五、薨スルノ前數日、僧崇傳、天海ヲ召
シ謂テ曰、寡人死セハ久能山ニ窆シ法會ヲ増
上寺ニ設ケ、靈牌ヲ參河大樹寺ニ置キ、期後、改
葬シテ而シテ、廟ヲ日光ニ起ツヘシト、是歳十
月、改テ塋域ヲ此地ニトス、三年二月、廟成ルニ
十一日、詔シテ廟號ヲ東照大權現ト賜ヒ、尋デ
正一位ヲ贈ル、三月十五日、靈柩ヲ遷ス、四月、將
軍秀忠、日光ニ詣ル、八日、改テ新塋ニ葬リ、十六
日、主ヲ新廟ニ遷ス、天使事ニ蒞ニ祀典、尤盛ナ

リ寛永十一年、列藩ニ課シテ大ニ土木ヲ興シ
廟宇ヲ改造ス十三年ニ至リ初テ成ル是歲四
月、天海、門跡親王、及、台宗僧徒ヲ率井テ遷宮ノ
式ヲ行フ伊勢、加茂諸社ノ遷宮、古成式アリ而
シテ應仁以後、天下大乱、古儀散逸ス是ニ至テ
天海、廣ク典故ヲ搜リ折スルニ已ノ意ヲ以テ
ス朝廷モ亦、勅使ヲ發シテ神劔、神鏡ヲ納ル鷹
司、三條、日野、烏丸、四辻、廣幡諸卿、神事ヲ攝行ス
將軍家光、尾張、紀伊ノ二氏ト神輿ニ供奉シ列
侯、皆冠服シ騎シテ導シ拜殿ニ詣ル天海、十三

弟子ヲ隨ヘテ之カ導師タリ法會、五日ニ亘テ
一日ノ風雨ナシ天海、進賀シテ曰、朗清和氣、以
テ殿下ノ至孝ニシテ精誠、神佛ヲ感セシムル
ヲ徵ス可キナリト其十八年、復ヒ大ニ廟宇ヲ
修ス正保二年十一月、詔シテ宮號ヲ賜ヒ伊勢、
宇佐ノ兩神宮ニ倣フ三年四月、使ヲ遣シテ幣
ヲ賜ヒ後、以テ恒例トス世ニ之ヲ例幣使ト謂
フ○大猷公、諱ハ家光、台德公忠秀ノ子ナリ慶安
四年四月二十日、薨ス歲四十八、堀田正盛、阿部
重次、内田正信、三枝守重、歿ス五月二日、遺命ニ

因テ日光ニ葬ル十七日、勅使ヲ下シテ大猷院
殿ト謚シ正一位太政大臣ヲ贈ル詔シテ御製
ノ和歌五首ヲ賜ヒ喪ヲ吊スト云フ○天海僧
正、本姓、蘆名氏、家ヲ出テ比叡山ニ學ヒ内外典
ヲ究ム曾テ甲斐ニ游ヒ武田信玄ノ優待スル
所ト爲ル伊達政宗ノ蘆名盛重ヲ滅スヤ天海
圍ヲ潰シ出テ回復ヲ謀ル然レモ果サス家康
深ク其器略アルヲ知テ藤堂高帟、本多正信
ト等ク密議ニ參ス或云、廣大寺ノ鐘銘ヲ論ス
ル半、其謀ニ出ツト家康ノ薨スルヤ遺命ヲ奉

シテ日光山ニ改葬シ祭ルニ神佛兩儀ヲ以テ
ス後、更ニ寛永寺ヲ創メ親王ヲ迎ヘテ之カ主
トナシ一ニ洛東延暦寺ニ倣フ常ニ秀忠父子
ノ爲ニ尊事セラル時人、目スルニ緇衣ノ相ヲ
以テス寛永二十年、寂ス壽一百三十歳奏シテ
慈眼大師ト謚ス附記崇傳ハ南禅寺ノ長老ト
爲リ金地院ニ住ス家康、引テ帷幄ノ謀ニ參セ
シム寺院、若クハ異邦、往復ノ書簡、皆、其手ヲ經、
家康ノ駿府ニ老スルヤ日野唯心ト入り侍シ
テ古今ノ禮儀典例ヲ講ス寛永十年、寂ス秀忠

靜齋曰、好戲謔、讀去一噓、

奏シテ圓照本光國師ト謚ス日記若干卷アリ
頗當年ノ事ヲ徵スルニ足レリ
滿願寺前導者ニ謝ス獨淨土院ヲ過テ安達盛長
ノ墓ヲ訪ヒ復轉シテ西行スルヲ幾町板挽町ニ
抵テ南折シ大谷ヲ渡ル鳴蟲山ニ循ヒ河ニ沿ヒ
テ進ム時ニ雨頓ニ斂リ風亦穩ナリ路左百餘ノ
地藏ヲ列ス或ハ剽セラレ或ハ馘セラルトシ
テ完軀ノ者ナシ衆生濟度ノ功德其或ハ之アラ
ン然レモ余ハ竊ニ其一身ヲ保チ得サルヲ晒フ
ノ漸進メハ奇石怪巖水ヲ沮ミ水極テ深キ處

杜陵曰、蓋此字
是海所書、是海
空海以音相近、
致此誤見一齋
翁紀行中、

コレヲ憾給潭後世含満ト爲ス前岸ニ護摩壇アリ
コレニ屋ス靈庇閣ト曰フ屋傾キ雨漏ル余其名ノ如クナラサルヲ歎ス一巖アリ水ニ臨テ歌
チ正ニ閣ト對ス巖土ヲ戴キ雜木多シ水面ヲ距
ル一數尺一大梵字ヲ剝ム譯スレハ即憾給ナリ
ト云フ俗稱ス空海筆ヲ擲テ自然現シ來ルト笑
フ可シ是ヨリ流ニ順ヒテ下ル一十町神橋ニ出
ツ乃知ル前日ノ所謂左方河岸ノ岐路即是ナル
一ヲ寓ニ歸リ杯ヲ命シ樓上ニ就テ士徳ト酌ミ
且語ル

靜齋曰一篇可
充風土記
杜陵曰涼趣可
掬

やう川氏のちうにんがやちかえ
むあう

二荒やまゆきと此かうきふきいみえ
とゆきゆきとあうき

樓西南ニ面ス此時殘雲全散シテ日色漸斜メニ
一面ノ涼風闌干ヲ拂ヒ無數ノ青山簾鉤ニ入ル
其風景賞ス可キナリ

人倚山村第一樓。橫欄嵐影夕陽收。京城北去僅
三日。風候依稀似暮秋。

午下五時、悵然愛ヲ割テ日光ヲ出テ歩シテ今市

ニ至ル途上雷雨ニ會フ有一絶

奔雷霹靂鼓山川、滿地迸珠何滂然。白雨乍晴雷
又歛。夕陽遙在斷虹邊。

聞キ得タリ小山驛ヲ距ル一若干、乙女村ノ民道
路改築賦役ノ重キニ堪ヘス壯丁數百、村中某寺
ニ據テ將ニ謀ル所アラントス巡查三名走テ衆
中ニ入り説テ散セシメント欲ス聽カス之ニ尋
グニ劔ヲ以テス衆齊起爭鬪互ニ死傷アリ事數
日ノ前ニ在リト予之ヲ听テ歎恨ス蔦屋^八ニ宿
ス池水潺湲トシテ響アリ終宵夢ヲ成サス

おゑすうらまゝを洗ふうちーてゆゑ結
ハ夢也水の音なり

十六日、曉發、今市ノ驛端、道岐ル右ハ則、椽木ヨリ
上州高崎ニ至ルト云フ左路ニ就テ行ク大澤ニ
抵ル、道程二里、此間、檜杉路ヲ夾ミテ鬱然茂生ス
ル、他驛ト殊ルナシ、稍下レハ朝暾漸高ク、日光
樹杪ヲ射、夜來ノ風煙散シ盡シテ、天ニ纖翳ナシ
右顧スレハ鬢髮山巍然トシテ高ク、左ハ則、疇昔
跋涉シタリシ原野ニシテ、鬼怒川上、當時雲霧ハ
爲ニ見ル能ハサル所ハ諸山整然、髻ヲ露シテ并

杜陵曰、前遊歷
々其苦其快、悲
衝胸來、

立セリ、森友村ヲ經、大澤驛ヲ過キテ、徳次郎驛野
ニ達ス、此驛別レテ三トナル上驛々端、標柱アリ
題シテ曰、大谷觀世音道店ニ就テ問ヘハ云、此ヨ
リ宇都宮ニ至ル三里、大谷ニ廻ラハ一里ヲ加フ
ヘシト、此ニ飯ス看ル男體山上、一點ノ雲、颼然瀾
滿シテ雨、尋デ至ル二人、齊ク起テ雨ヲ侵シテ迂
路ヲ取り南向シテ進ム、民舎若クハ田圃ノ間、經
過、凡半里程、茂林ニ入ル時ニ風起テ雨彌急ナリ
予疾走シテ遂ニ士徳ト失ス、行々幾町終ニ林際
ヲ知ラス立テ左右ヲ顧レハ西山麓ニ當テ一家

アリ依稀トシテ樹間ヲ洩テ來ル因テ右折シ杠
ヲ渡テ其處ニ抵レハ何ソ圖ラン柱礎碎摧シテ
但屋蓋ノ依然トシテ地上ニ貼スルヲ見ルノミ
予、憮然トシテ立ツ久シ轉シテ一家ヲ得之ニ
就テ問フ曰、是ヨリ一里有半、宜ク南ニ向テ直進
スヘシ村名ヲ問フ答テ曰、新里ナリト其言ニ循
ヒ數小村ヲ過ク愈進テ山麓愈近ク路將ニ窮セ
ントスルノ處忽折テ東ニ入ル一砦アリ巖角突
岨躍テ路上ニ出ツコレヲ仰ケハ人ヲ壓シテ墜
ントスルカ如シ蹉跎促行、而シテ過ク砦根ニ就

テ廻レハ峯岳萃嶽、更ニ數砦山アリ高低環擁シ
テ自ラ一境ヲ成ス中間一水、南ニ流ル姿川ト曰
フ石砦ヲ架スコレヲ渡リテ小店アリ就テ憩フ
時ニ雨漸歇テ一天清朗拭フカ如シ顧テ來路ヲ
望メハ終ニ之ヲ岨間ニ失ス殆入ル可キナク又
出ル能ハサル者ニ似タリ店側ノ高槐、蟬聲頻ニ
起ル

のうれてもおうつ蟬のせうれとやみのる
さやうん聲さうとらん

僮父アリ入テ座ニ休ス予問テ曰、近地ヲ人カ將

杜陵曰奇語

遠方ヨリ來ルカ曰此村ノ者此村何トカス曰荒
針村曰此川源ヲ何處ニ發シテ又何地ニカ流ル
答テ曰源ヲ新里ニ發シ思川ニ合シテ上野ノ境
ニ到リ利根ニ入ル抑客ハ何國ノ人ニシテ何處
ヨリ到ルカ余曰晃山ニ遊テ歸ル而シテ苟日本
ノ人ナルヲ知ラハ何ソ其國ヲ問フヲ須知
曰日光ハ遊果シテ奈何ソ余答テ曰日光此ヲ距
ル僅ニ數里其風景ト金殿朱樓ト子等厭見シテ
而シテ飽聞スル所ナラン我何ハ之ヲ説カン以
ムハ無クハ則日光アルハ所以ヲ述ン乎是ニ於

杜陵曰形容逼
真

テ德川氏創業ノ艱難ニ就テ概説一遍ス了レハ
則石上趺然履聲ヲ聞ク乃士德ナリ相携ヘテ店
ヲ出テ南砧山ノ間ニ入ル數十武ニシテ門アリ
之ニ入ル峯岳窮スル處雕シテ丈六ノ佛像千手觀音
ヲ為ス前面堂廣サ六間ヲ作テ以テ之ニ倚ル又一堂
廣サ十間アリ折テ而シテ接ス是亦巖ヲ鑿シテ
數多ノ佛體ヲ為ス者門内衰サ百步可リ巖端飄
然悠揚シテ之ヲ蔽フ仰視スレハ天ヨリ垂ルハ
雲ハ如ク大鵬カ扶搖ニ搏ツ翼ニ似タリ堂主余
ヲ導テ回テ其巔ニ出レハ眼界豁然姿川ノ上流

祖山巖角簇立峯ヲ為ス岩々崑々、更ニ其數ヲ知
ラス知ル是、全國無比ノ仙境タルヲ眺望少時既
ニシテ降ル庭上ニ松アリ松下ノ一泉、其響消々、
心頭ノ紅塵洗ヒ盡シテ痕ナキノ思ヒアリ
おときけりるふを哀すし松陰のひそ間を
く霞くたみの真清あり

西巖ノ裏面ニ沿ヒテ廻クル看ル數十ノ石工隊
ヲ成シテ以テ磊石ヲ截ル就テ熟視ス其質極テ
鬆而シテ前日見ル所ノ大屋石ヨリモ堅シ乃風
雨ノ為ニ蝕セラル、一少カルヘキヲ知ル只恐

杜陵曰、小民淳
朴、役々奔命狀
可觀

ル如此ニシテ數年ヲ過キハ今日、覽ル所ノ岩石、
終ニ其全形ヲ失ハシ、一田間ヲ歷、一村ヲ過キ
郊原ニ出ツ道、東ニ向テ進ム泥濘蹠蹠、行步極テ
艱ム時ニ看ル幾十役夫群ヲ為シ車ニ馬ニ材石
ヲ積載シテ以テ之ヲ宇都宮ニ致ス又看ル一大
棟梁ノ材、車十餘輛ニ負ハシメ數十百人許邪シ
テ而シテ行ク予、立テ之ヲ問フ曰、此棟梁、彼林石
ト皆、是縣辭新造ノ所用、官命慢ス可ラス小人農
事ヲ擲チ道路ノ泥濘ヲ顧ミス走テ役ニ服スル
ト如斯ト余實ニ其盛舉ニ感ス晡時、宇都宮ニ抵

テ手塚舎平五郎ニ投シ紀行ヲ草ス士徳後ル、
半晌而シテ到ル聞ク此ヲ距ル一若干禪林寺ニ
蒲生君平君名秀實ノ墳墓アリト訪フヲ得ス
十七日晴昧爽馬車ニ投シテ旅舎ヲ出テ舊路ニ
就テ走ル石橋羽川小山等ノ諸驛ヲ經此間道路
泥濘蹠蹠前日ニ比シテ一層ノ艱ヲ覺ユ車常ニ
二馬ニ駕ス此日駕スル所右驃色黄左驪色赤而シ
テ驃ハ背ニ白汗ヲ漲ラシ口ニ泡沫ヲ噴キ疲憊
ノ狀驪ト駢馳シ得サルモノ、如シ然レモ之ニ
飲カヒ之ヲ卸ス毎ニ左ヲ先ニシ鞭撻ハ則右ニ

杜陵曰御者亦
庶有道者

在リ予深クコレヲ怪ム御曰驃ハ性懶常ニ憊困
ハ狀ヲ呈シテ以テ逸ヲ貪ル驪カ如キハ則否ラ
ス若ソハ流汗噴沫驃ハコトクナルハ時ハ乃彼
絶命ハ秋ナリ馬ヲ使フヤ宜ク其性ヲ知ラサル
ヘカラス余之ヲ聞テ甚感スル所アリ嗚呼馬ヲ
御スルモ亦復コノ如キ乎間田野木ヲ經テ古河
驛下ニ達ス聞ク發船ノ處ハ驛西十町許ニ在リ
ト依テ更ニ一鞭ヲ加ヘ以テ其處ニ抵リ井上平兵衛
ニ就テ問フ曰東京ヨリノ瀛船著スレハ即發
ス因テ時ニ少シクノ遲速ナキニアラスト雖氏

概第一發ハ正午ニシテ第二發ハ午后二時ニ在
リ而シテ今ヤ十時ヲ過ク待ツ一時有半ナラ
サルヲ得スト余問ヒ曰聞ク鮭延寺ニ蕃山熊澤
翁ノ墳墓アリト寺此ヲ距ル幾許ソ答テ曰半里
程曰一詣シ來テ可ナラン乎曰思フニ往復ノ外
尚必時ヲ移サン若果シテ然ラハ一發船中ニ在
ルヲ得サルヘシ客ノ爲ニ之ヲ計ル宜ク他日
ヲ期スヘキナリト予曰我行固遊觀ノ爲ナリ遊
觀ノ爲ニシテ後レニ憂フル所ニアラス唯發
船ヲ俟テ日晷ヲ徒過ス是ヲ之レ惜ム耳士德ト

共ニ出テ東ニ向テ市街ヲ横斷ス尚圃間ニ就テ
進ム一村落ヲ得之ヲ大堤ト爲ス寺コ、ニ在リ
門前高ク標シテ曰今月今日蕃山先生ノ遠忌ニ
當ル因テ茲ニ佛會ヲ舉行ス云々門ヲ入テ進ム
一、百餘武一巨刹アリ庭前ハ估客隊ヲ爲シテ菓
餅雜厝シ村童野婦喧闐地ニ滿ツ階ヲ登テ堂ニ
入レハ但、肴ル正面段ヲ設ケ上ニ一牌ヲ安シテ
菓物ヲ薦ノ香華ヲ供フ又見ル一室幾多ノ僧侶
善男善女ト群坐シテコ、ニ在ルヲ就テ問フ上
段安スル所ノ牌ハ即蕃山先生ナリヤ答テ曰然

リ是ニ於テ薄典ヲ具シ一拜ス又問フ先生ノ墓
何處ニ在リヤ曰堂後ニ在リ予邁テ又拜ス碑高
サ五尺題シテ曰熊澤息游軒伯繼之墓右ニ夫人
ノ碑アリ左ニ石棺アリ之ヲ繞ラスニ石欄ヲ以
テシ總テ石階數級ノ上ニ在リ獨當年ノ事ヲ憶
ヒテ低迴遲々時ニ一詩ヲ得復ヒ堂ニ入テ紙筆
ヲ請ヒ書シテ以テ牌前ニ致ス詩曰

遠尋芳躅城東寺滿地蒼苔徑自斜墓畔高槐堪
吊古萬年枝上著殘花。

○按スルニ蕃山翁本姓野尻名ハ伯繼字ハ了

介息游軒ト號ス蕃山ハ其別號ナリ平安ノ人
出テ外祖熊澤氏ノ後ト爲ル天性深智雋才古
今ニ卓絶ス弱冠ニシテ岡山烈公名光ニ仕フ
公將ニ用サル所アラントス而シテ辭スルニ
未學ハサルヲ以テシ去テ業ヲ中江藤樹ノ門ニ
修ム時二年二十三越テ七年公之ヲ召還シ任
スルニ國政ヲ以テス是ニ於テ窮困ヲ賑シ節
義ヲ表シ聖教ヲ布キ以テ人倫ヲ明カシ武備
ヲ嚴ニシ以テ不虞ヲ戒ム一時新政海内實ニ
耳目ヲ驚カス嘗テ君ニ扈シテ江戸ニ來ル歸

期ニ及ビテ別ヲ板倉侯ニ告ク侯曰吾之ヲ籌
ルニ子其終ヲ善クセント欲セハ則仕ヲ致シ
テ早ク田里ニ歸セヨ蕃山拜謝シテ去ル然レ
氏眷遇優渥俄ニ骸骨ヲ乞フヲ得ス後數年
事ヲ共ニスル者ト隙アリ蕃山心自ラ安ンセ
ス乃岡山ヲ辭シ京師ニ出ツ貴顯縉紳之ニ侯
シ門常ニ市ヲ爲ス是ニ於テ去テ明石ニ到ル
明石侯本蕃山ヲ師尊ス禮遇尤厚シ侯ノ封ヲ
古河ニ移スヤ蕃山從セテ之ニ移ル元祿四年
八月十七日疾ヲ以テ古河ニ没シ此寺ニ葬ル

聞ク最上義光ノ臣鮭延越前最上氏亡ヒテ後從
士廿人ヲ率井來テ此地ニ留ル死後從士等相謀
リテ一寺ヲ創建ス鮭延寺即是ナリ前路ニ就テ
一走シ共ニ井上ニ歸ル第一船ハ已ニ發シテ二
船ハ未著セス是ニ於テ一浴シテ小室ニ就キ假
寐シテ待ツ室利根ノ河流ニ浴ヒテ東方ニ面ス
庭上ニ一梅樹アリ薄テ而シテ之ヲ圍メハ其大
サニ抱強半但惜ムラクハ枝條皆枯死シテ僅ニ
幾朶ノ萌蘖ヲ遺ス而已幾ナクシテ瀛笛數聲來
著ヲ報ス乃之ニ乘シテ古河ヲ發ス是ヨリ東京

二到ル水上、正ニ二十余里ト云フ時ニ一天清明
纖翳ヲ留メス平流穩波、船駛スルヲ箭ヨリモ疾
シ下ルヲ若干、右ニ栗橋驛ヲ見ル、纔ニ之ヲ過レ
ハ水別レテ二トナル、左ハ則、利根ノ本流ニシテ
常陸、下總ノ界ニ沿ヒテ東、銚子ノ港ニ至リ、海ニ
入ル所謂、坂東太郎、即、是ナリ、右ハ則、總武ノ界ヲ
流レ南、行徳ヲ過キテ、灣ニ入ル、呼テ江戸川ト爲
ス、是、寛永年間、開テ以テ漕運ニ便スル所故ニ、又
稱シテ新利根ト謂フ、暫、左ニ就テ下ル、前面、遙ニ
見ル、常州ノ筑波山、蒼然トシテ天際ニ高ク安房

靜齋曰、有情有
色、七絶上乘、
杜陵曰、色清味
濃、

上總ノ群山、其右ニ并峙スルヲ又首ヲ回ラシテ
北ヲ望メハ男體、如寶、眞子ノ諸峯、依稀トシテ杳
靄ノ中ニ相駢フ其狀、恰我ヲ送ルモノ、如シ
蒼茫、刀水ニ州間、三十里、程、衝浪還指、顧、天邊一
螺、黛、依依、送我昨遊山、

稍下テ關宿ニ抵レハ分流一派、右ノ方、小手指村
ヲ色テ而シテ江戸川ニ合ス、合スル處、堰テ以テ
堤防ヲ修ス、因テ通スルヲ得ス、船ヲ捨テ西岸ニ
登リ、村落ヲ經、一木標ヲ見ル、墨書シテ曰、千葉縣
東葛飾郡、下總關宿向河岸村、幾ナクシテ河畔ニ出

レハ則、一瀛船アリ客ノ到ルヲ待ツ乗テ又下ル
漸下レハ筑波山、漸轉シテ左方ニ在リ右ハ則、一
望平夷、些ノ丘山ヲ見ス其望窮ル處、乃、東京市區
ト爲ス時ニ看ル一道ノ黒雲、低レテ原野ヲ蔽フ
其下、正ニ驟雨アルヲ知ル

むきー野ハゆふたちとちり雲井あふ婦一の
高根さくたさるを法

須臾ニシテ日暮レ雨又尋テ至ル更漸深ケテ雨
聲漸猛ク燈影黯淡客身ヲ照ス暗ニ覺エ十年ハ
幽愁一時集リ來テ心頭ニ纏綿スルヲ

弘綱云、朋友を
思ふ文意以し
感ぬらく哥も
すゝ哀みらぞ

杜陵曰、余嘗與
平田子周、緩歩
東海、是行憶此
亦有詩云、嘗約
晃山探林泉、空
聞計音下東山、
憶起東海五十
驛、提攜徜徉共
晨夕、風光在目
人已非、堪見滿
路山水碧

此のうみ日光あそびんといふ
けつゝ人知れりけしみにそむい
まぢる菅沼あゝいねや市のうりて
いふハ福井はあき今むとを平田ぬ
さゆゑさむるふ廣思ふほろりて
あどふみ月廿二日はあんなほろ身
まのうき思ふさるゝたいねをさへ
ハ左男さるゝさるゝ二人のさる
あはむは菅沼さるゝあふさるゝ
らんを平田ハあふさるゝさるゝ

晃山記下
卷二下
廿三

清鉅云、雨はま
ろく舟のと
す火の影を
おひふまふ
かゝりて
かゝりて

杜陵曰、夜景如
畫

一母のありきるふすいむ
り一事の夢なりとてかたみり
故なきつ

ちきりて一はたさるるまゆ
アも共りかゝるるは

既ニシテ雨較、歛ル予戸ヲ推シ出テ船端ニ立ツ
満目冥濛、其處ヲ知ラス唯、纔ニ兩岸ヲ彷彿ノ間
ニ見ル而已

滿江烟雨坐來收。岸樹依微夜色幽。一水茫々天
不盡。幾多篝火認漁舟。

幾ナクシテ船、兩國橋下ニ達ス但、看ル街衢縱横
商廛估家、軒ヲ連子テ櫛比ス燈火煌々、光焰天ヲ
焦カス晝間ノ雜閑業已ニ幾分ヲ減スト雖、凡然
レ氏往還頻繁、絡繹ルコトシ予、愀然トシテ想
フ、化仙ハ吟身頓ニ黃塵百丈ハ中ニ落ルヲ士德
ト共ニ岸ニ登テ橋畔相賀樓ニ投シ觴ヲ舉テ以
テ互ニ此行ノ恙ナキヲ祝ス

席上書似士德

山川無變化。交友有分離。惆悵從今後、此遊難復
期

杜陵曰、感慨

懷中時辰ヲ展スレハ已ニ十二時ヲ過ク因テ匆々樓ヲ下テ士德ニ辭シ獨輕車ヲ飛シテ以テ吾居ニ歸ル此行經ル所凡三國而シテ治ハ一府四縣ニ跨ル山ニ登ル一原ヲ越ユル二河ノ大ナル者四小ナル者無數湖一瀑八資ル所或ハ舟或ハ車而シテ日ハ僅ニ六日

晃山紀行 一名曰光みち此志と草下畢

一枝才華大如椽
堪涌清游詞幾篇
金碧輝煌映雲處
蓋簪陸績拌初前
誰論遺澤人間遍

空以美觀天下傳
憐子吟詩歎偉業
勝他修殿竟資捐
明治乙酉秋日
紫陽應當記

和又の好す人ハ清又の好
まりふの好す人ハ清又の好
海入の好す人ハ清又の好
をれに好す人ハ清又の好
なるに好す人ハ清又の好
和又の好す人ハ清又の好

五十年來。此人所共知。其所以
不為人所共知者。其故何也。
此其所以為人所共知者。其故何也。
之能也。作來弘綱。

跋



見山之奇秀。子有咀嚼
之。發為此文。故渺漫雄
偉。如瀑如湖。巍然儼然。

披閱之間。雲起烟繞。恍
如身在其境。誰謂之子
有文。則是山文也。非是
山文也。其奇秀發。子有

文也。甲申秋九月
杜陵八戶民拜撰



明治十八年十二月五日出版御届

著者

長野縣士族

小松 恒

神田區三崎町二丁目拾番地寄留

東京府平民

石川 治兵衛

日本橋區馬喰町貳丁目壹番地

出版兼
發兌人

